# 割礼という神事

魔衣



HinaProject Inc.

## 注意事項



【作品タイトル】
割礼という神事

【Ｎコード】
Ｎ３０４９Ｖ

【作者名】
魔衣

【あらすじ】
とある田舎の村でおこなわれる神事それは割礼の儀式。それに伴う異様な儀式や風習を少年・少女達は体験する

## 巫女割礼（前書き）

これはフィクションですまねしないように

# 巫女割礼

ある田舎の神社。白い着物に水色のズボンのような袴をはいた髪の長い凛とした美少年。　神前で女性神官から「準備なさい」元気な声で「はい！」と言われ袴を脱ぎ白い着物がはらりと落ちる胸元にはサラシがぎっちりと巻かれている。
下半身はおろしたての白いフンドシが絞められていた。そしてそのフンドシを解いていく。陰毛は先ほどの禊で丁寧に処理されている。

そこにはこの人物が少年である印が無く。一本の綺麗な割れ目が。胸のサラシも取り去り形のいい大きな乳房が。
彼ではなく彼女はこの一年少年神職としてこの神社に仕えてきた。そしていま次の段階に移る儀式に望むのだ。
一糸纏わぬ生まれたままの姿になった少女は腰を下ろしまたを広げた。
まだ男を知らない少女の性器に女性神官は左手で陰核を引っ張りあげる。「あっ」少女は軽くうめいた。おなじみの快感がほとばしる。

先ほど湯殿で丁寧に洗い清められたのである。　そして股間に度数の極めて高い酒がかけられる清めと消毒だ。
「サァ！参ります」少女は誇りに、そして恐怖に満ちた大きな声で答える「はい！お願い致します！」　口に手ぬぐいを押し込んだ。
女性神官は剃刀をあて力を込めて引く
「ぎゃぁぁぁぁーーーー！！」

村中に響き渡るような少女の悲鳴。下に引いた紙にボタボタと垂れる鮮血。
女性神官は手を止めず小陰唇も切り落とす。　再び村中に響き渡るような少女の悲鳴
「これでこの神事は終了です」
暖かい別室で少女は手当て受けた。痛みと失ってしまった大切な部分の事を思い泣いている。
愛しい年下の許婚の少年の事を思い朝も夜も無くしごいていた部分がなくなってしまったのだ。　巫女に選ばれた時点でいずれ儀式で切り取られることは判っていたのに、神に仕えるみとして慎まねばならないのに。

それからしばらく。
大勢の観光客の前。早春の木漏れ日の中、大きな枝垂れ桜の咲の下に二人の巫女が神楽をまっている。
先輩の巫女と最近奉職したばかりの新人巫女だ
二人ともかなりの美少女だ。手前にいる観光客の少年達「着物ってノーパンらしいぜ」
「ノーブラなのは間違いないぜ」年上の巫女がノーブラなのは誰の目にも明らかだ。白い着物の下で大きいふくらみがたゆんたゆんと揺れている。年下の巫女には絶対に必要ない。
だが観光客は知らない。パンティなどもちろん二人とも穿いていないノーパンである。
年上の凛とした巫女の緋色の行燈袴の下にある股間は少し前に神代の時代から続く村の因襲により陰核も小陰唇も切り取られているうえに膣に入り口を封鎖されている。

そして年下の可愛らしい巫女の股間にはなんと、しっかりと皮に包まれた
顔だちよりもかわいらしいおちんちんが神楽の舞合わせて押さえつけるものがないのでブルンブルンと揺れていた。

少年巫女は一年ほど巫女として神につかえる。そして年上の巫女の手により包皮を切られその汚れない血を神にささげる。そして年上の巫女の
そして最後の儀式で年上の巫女は神前で年下の少年巫女のペニスに処女膜をつらぬかれることになる。
この神社の巫女の資格は生娘でる事。しかし純潔を失った瞬間にただの村娘に戻る事になるのではなく新たにこの少年巫女から神官に生涯仕える巫女に新たにになる。
少年巫女もまた同じである。

一年後神事　ある寒い冬の日。朝日も上らない早朝
ある田舎の古い神社。巫女装束を着た長い黒髪、つややかな肌をした健康そうな可愛らしい美少女。　不安そうなそれでいてどこか誇らしげな面持ちである。年上の巫女の前で正座してふかぶかと頭を下げる。
そして
神前で歳上の巫女から「準備なさい」と言われ。仰向けになり緋色の袴をたくしあげる。膝を立てて脚を開く。尻のしたに和紙の束を敷くそこにはありえないモノがあった。この巫女が少女でなく少年である印が。　あたりに篝火が幾つか有るとはいえ寒さでちぢみあがっている。
陰毛はまだ生えていないようだ。可愛らしいおチンチンに歳上の巫女は極めてアルコール度数の強い酒をかける。　清めと消毒だ。左手で皮を引っ張りあげる。「サァ！参ります」少年巫女は脅えたしかし大きな声で答える「はい！お、お願い致します！」

剃刀をあてて力を込めて引く
「ぎゃぁぁぁぁぁぁーーーーーーっ」
村中に響き渡るような少年巫女の悲鳴。
下に引いた和紙にボタボタと垂れる鮮血。歳上の巫女「これで神事の第一段は終了です」
少年巫女は年上巫女の手を借りて暖かい部屋にうつりそこで年上の巫女により手当て受けた。布団に寝かされ下半身をやや高くしている。
「うぁ〜痛いよ〜痛いよ〜助けてぇ〜」
あまりの痛みに声をあげて泣いている。
歳上の巫女は優しく告げる。
「痛い儀式はこれでお仕舞い。傷が癒えたらお楽しみの筆下ろしの儀式よ」とそして頬を朱に染めた。
少年巫女はっとして泣き止んだそして次の儀式でこの年上の巫女に自分陰茎がつきたてられるのを想像して割例したてのオチンチンが一気に規律した。傷口が広がりました。「痛いよ〜」

筆卸
山奥の神殿　畳が敷かれそこに大きい布団がしかれ枕が二つ並んでいる
年上の巫女「これより儀式を始めたいと思います。」
年上の巫女は巫女装束を脱ぐ。緋色の行燈袴を脱ぎ白い着物をはらりと落とす
この一年で彼女はさらに女らしく成長した。スリムなのに胸とお尻ははちきれんばかり。腰まである長い黒髪襟足のところで結んでいる。一糸纏わぬ生まれたままの姿になる。
少年もまた白い着物をを脱いで全裸になる。彼もまた1年で成長し

たがまだまだ女の子で通じる。割礼で包皮を切り落とされた陰茎はすっかり回復し隆々といきり立っている。

二人とも儀式の前の禊を済ませている。陰毛等は完全に処理されている。

年上の巫女は膣の封鎖を数日前に解かれている。これは巫女に純潔を強制的に守らせるである。少年巫女もまた包皮を特殊な器具をつけさせられて自慰も性交もできないようにしておいた。その為に数日おきに夢精を繰り返していた。少年巫女はこの憧れの少女と結ばれるために１年もむちゃくちゃな境遇に耐えてきたのだ。そして明日から自分はこの神社の神官としての修行が始まる。

## 巫女割礼（後書き）

これから少年×少年と少女×少女がありますのでよろしく。